

---

# **孤独な俺と無邪気な君と**

大空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な俺と無邪気な君と

### 【NNコード】

N2726X

### 【作者名】

大空

### 【あらすじ】

ありふれた日常に退屈し、いつも一人でいた俺が転校生の長塚有希と出会い関わっていくことで少しづつでも確実に成長していく学園ラブコメディ。

## プロローグ（前書き）

皆様始めました。大空と言います。この作品は私の処女作になります。どうか生暖かい目で読んでいただけると嬉しい限りです。

## プロローグ

黒板に字を書いている教師の背中を見ながら俺は思つ。  
何故こんなことをしているのだろうと。

いつものように朝起きて、学校に行き、授業を受け、家に帰る。  
そんな当たり前の毎日を何度も繰り返す。

いつか学校を卒業し適当な仕事に就き生きるために働く。  
特に夢も目標も無い俺はきっと将来そういう風になるだろつ。

### キーンゴーンカーンゴーン

チャイムが鳴り授業が終わる。

これで今日の授業はすべて終わった。

あとは帰るだけ。

俺は急いで帰る支度を始める。

担任が教室に来て帰りのHRを始めた。

俺はすべての言葉を聞き流し、クラスの委員長が号令をすると同時に俺は教室を出る。

俺こと宮野和也は平凡な高校二年生だ。俺が通つている光坂高校は家から最寄りの駅で一駅乗り継いだところにある。光坂高校は偏差値が高いわけでも低いわけでもない普通の高校だ。何故俺がこの高校に受験をしたかというと、単に確実に入れると思ったからだ。俺の成績は大体中の上ぐらいで中三の時の担任にも問題ないと言われた。

電車に乗り次の駅に到着するまでの間、俺はカバンから本を取り出した。本と言つても読んでいるのはライトノベルだが。自分で言うのもなんだが俺はオタクである。そこまでひどくはないがアニメなどをよく知らない奴からすれば俺は立派なオタクと言われるだろつ。電車を降りて家まで歩きながらも俺は上を向いた。

俺はこんな日常が嫌いなわけではない。親に捨てられたとか、親が死んだとかがあるわけでもない。親は共働きで家にいないことも多いが特に不満はない。俺はきっと十分に幸せなのだろう。

だけど俺はこんな日常がつまらない。

いつそのこと空から美少女降つてくるとか、異世界に送り込まれるとかそんなことが起きないだろか。

そんなことを考えても現実はそう甘くない。いくら空を見上げていたところで女の子は降つてこないし、異世界に送り込まれることもないだろ？。もし仮に空から女の子が降ってきたとしよう。その女の子はそのまま地面にぶつかり見るも無残になるし、異世界だって本当にあるとは思えない。

いつの間にか歩かず突っ立てるに氣が付いた俺は再び歩き始めようとしたところで、ふと誰に見られている気がした。

俺もついに頭がおかしくなったかな。

なんてことを思いつつあたりを見回していると遠くにいる一人の女の子と目があつた気がした。

女の子すぐに目をそらしどこかに歩いて行つた。  
何だったんだ？

考えてもよくわからないから俺は

「まあ、いつか」

と考えるのをやめて家に帰ることにしてしまった。

## プロローグ（後書き）

皆様どうだつたでしょうか？まだ始まつたばかりなので何とも言えないとは思いますが、この続きも読んでくださると嬉しいです。応援よろしくお願ひします。  
感想やアドバイスなどもお待ちしています。

## 第一話 「つまんなーの……」

翌日、朝のH.Rで

「実は今田うちのクラスに転校生が来てします。」  
と言ひ担任の言葉にうちのクラス一年一組はものすごい盛り上がりを見せていた。

「先生！男子ですか？女子ですか？」

「どんな子ですか？」

「早く教室に呼んでください」

はつきり言つてものす「こくひるたー」。

もう少し落ち着けないものだらうか？

とか思うものの正直なところ俺もその転校生がどんな奴なのか気になつていた。

「静かにしないと転校生が入つてこれないだらう。」

とクラスのまとめ役である佐藤何とかが周りを注意した。

下の名前は知らないがうちのクラスに佐藤は一人だけなので特に問題はないだらう。

一番最初に騒ぎ出したのはお前だけなどな：

佐藤は何かあるたびに騒ぎ出し、周りを煽つて最終的に自分でその場をおさめる。

「そういうお前だつて騒いでたじやんかー。」

こいつは確か……だめだ思い出せない。

といあえず山田（仮）としておこう。

山田（仮）は佐藤とよくひるんでいる奴…だった気がする。

山田（仮）のことは置いとくとして、俺もこいつのひるには贊成だ。

お前が騒いだりしなきゃいいだらう。

そう思つがおそらくそれは無理だらう。

佐藤とは一年の時も同じクラスだつた。ひょんと話したことにはなか

つたがいつもこんな感じで目立っていたので何となく覚えている。一年の時佐藤はよく教師に「お前が静かにしていればいいのだが」とか「あまり周りを煽つたりするな」などと言われていたが、二年になつてからはそういうのもなくなつた。おそらく教師も諦めたのだろう。うるさくなり過ぎたらちゃんと注意もするので教師からしたら悪い奴じやないが、少し厄介な生徒と言つたところだろうか。

「はいはい。今から転校生を教室に呼ぶから静かにしてね。」「はいはい。今から転校生を教室に呼ぶから静かにしてね。」

担任がいうと同時にクラスが静かになる。

最初から静かにしてればいいものを。

「じゃあ、教室に入つてきてー」

ガラツ

教室のドアが開きそこから入つてきたのは長くてきれいな黒髪をした女子。瞳はきれいなオッドアイ…なわけがなく普通に黒い瞳だつた。身長は男からすれば低いほうでまあ女子の平均ぐらいだろう。はつきり言つて可愛かった。一次元のキャラと比べれば普通な気はするが、クラスの女子の中では一番と言つてもいいかもしない。まあ好みは人それぞれなので絶対にクラスで一番かどうかはわからないが。

「長塚有希です。家庭の事情でこちいらに来ました。これからよろしくお願いします。」

長塚有希は人懐っこい笑顔でそう言つた。

おそらく今の笑顔でクラスの男子の何人かは長塚有希に惚れたことだろう。

チラツ

一瞬長塚と目があつた。

たぶん教室全体眺めでもしてたまたま俺と目があつたのだろう。

まあ長塚は俺のことなんか気にもとめてないはずだ。

「じゃあ長塚さんはあそこの席に座つてね。」

「はー!」

長塚の席は廊下側の一番後ろとなつた

ちなみに俺は前から二番目廊下から四番目だ

ほとんど真ん中ではあるがしそうがない

今は五月の下旬だからあと一ヶ月ぐらいで席替えがあるだろう

それまでの我慢だと自分に言い聞かす

「HRはこれで終わりにするからあとは質問タイムね」

「おお!先生わかってる~」

佐藤も転校生が来たことでテンションがものすごく高い。

「じゃあさつそく質問!どこから来たの?」

「趣味は?」

「前の学校つてどんな感じのとこ?」

さすがは転校生人気者だな。

クラスのほとんどの奴らが長塚の席集まつている。

俺は自分の席からその様子を眺めている。

俺以外にも席から動かずに長塚のほうを見ている奴らはいる。

そういう奴らはおそらくそこまで転校生に興味がないか、自分もその輪に入るのが恥かしいのか。

その辺のことはそいつら本人に聞かなきやわからないがまあ別に特にすごい理由があるわけではないだろう。

ちなみに俺はただ聞きに行くのが面倒なだけだ。

俺だつて転校生がどんな奴かは気になる。

でも何か月かしたら普通にただのクラスメートになるわけでどんな奴なのかは見てればわかるはずだし、別に何か俺に影響を及ぼすわけでもない。

だから俺は質問攻めになつてゐる長塚の観察をやめて、いつも通り力バンからラノベを取り出し一時間目の授業が始まるまでの暇つぶしを始めた。

## キーンコーンカーンコーン

四時間目が終わり昼休み

俺はすぐさま購買へ向かう

購買で焼きそばパンとコロッケパンを買うと俺は急いで屋上に向かつた

本来屋上は生徒が勝手に入らないよう鍵がかかっており生徒は誰も屋上には入れないのだが、俺はちょっとした理由で屋上の鍵を持っている。

そのため昼休みはいつも一人で屋上に来て昼飯を食べる。

このことは俺以外の誰も知らない。

だから屋上はいつも俺の貸切というわけだ。

だが俺は昼休みにしか屋上に行かない。

休み時間や放課後は時々教師が屋上にやってくるのだ。

時々と言つてもそんな頻繁に来るわけではないのだが

放課後に一度そんなことがあり本気でばれるかと思った。

昼休みは教師も色々とやらなくてはいけないことがあるのか屋上に来ることは決してない。

だから俺はいつも昼休みは屋上で一人のんびりと昼飯を食つてゐる。

昼飯を食つた後は時間ぎりぎりまで屋上で過ごし五時間目が始まる一分前には教室に戻るようにしてゐる。

ふと今日うちのクラスに転校してきた長塚有希のことを思い出す。実は異世界から来たとか、超能力を隠し持つたりしないかなあ。なんて思つてみてもやはりそんなことあるはずもない。

「つまんねーの…」

思わずつぶやくがどうしたところで何も変わらない。  
それを理解しているからこそ余計に嫌になる。

## キーンゴーンカーンゴーン

予鈴が鳴った

そろそろ戻るか

俺は一度伸びをしてから教室に戻った

結局その日は特に何もなかつた  
普段と同じとしか言えない

転校初日だからというのもあり長塚の周りには結構な人が集まつて  
はいたが、そのうち長塚にもの仲のいい奴とかができると結局は普段  
通りになるはずだ。

翌日、今俺は凄く戸惑っている  
何故なら

「昨日は疲れたよ。みんなたくさん質問してくるから。」

今俺の目の前には昨日は転校してきた長塚有希が笑顔で俺に話しか

けてきてる。

何故こうなった！？

と叫びたいくらいである。

ちなみにどうしてこんな状況になつたのかといつと

俺は基本早めに学校に来ている

だからクラスではいつも一番に学校についている

今日もそうだと思つていたのだが

ガラツ

「あ、おはよー！」

教室に長塚有希がいた

バンツ

思わず思いつきドアを閉めてしまつた  
てか長塚学校来るの早すぎじゃねえの！？

いや俺がいうのもなんだけじゃ

早すぎじゃねえの！？

よしこつたん落ち着こつ

俺みたいなのがいるんだからほかにこの時間に来る奴がいてもおかしくはない。

まあつきり俺が一番だと思つてたのにほかの奴がいたんだから驚いたのはしょうがないと思つ。

とにかく教室に入ろう

ガラツ

「おはよー。」

「お、おはよ。」

クラスメートにあいさつすのって高校入ってこれが初めての気がする

いつもは教室に一番乗りしたらあとはずっとラノベ読んでたからな  
「ところでなんで今一回ドア閉めたの？」

「あ、ああ。まさかここ時間帯に誰かが来てるとは思ってなかつた  
から驚いて。」

「あはは。もうだよねー私もこんなに早く来るつもりじゃなかつた  
んだけど…」

「なら何でこんなに早く？」

早く会話を終わらせたいのだがこれだけは聞いておきたかった。

「時間見間違えちゃって大急ぎで来たらこんな時間に。」

長塚は「あはは」と恥かしそうに笑っている。

「そうなんだ。」

時間を見間違えたつて……でもまあそれなら明日からはまたいつも通りか。

問題も解決したしさうとラノベでも読むかな  
なんて思いながら自分の席に向かおうとする

「君はいつもこんな時間に来てるの？」

話しかけてきやがった！？

「まあね……」

俺はそっけなく返した

「なんだ。でも毎日こんなに早く来て何してるの？…あつ！  
もしかして部活とか？」

まだ話しかけてくるのか

俺は話しかけられたらちゃんと話し返すことにしてるので

「俺は部活には入っていない。帰宅部。」

「そつか。ならいつも何してるの？」

「…本読んでる。」

ホントいつまで話しかけてくる気だ？

「昨日もずっと休み時間本読んでたよね？」

「なんで知ってんの？」

「休み時間のたびに読んでるんだもん。そりゃ気付くよ。」

「それもそつか。」

「それで、何読んでるの？」

「これ。」

俺はカバンからラノベを取り出して一番最初のページを開いて見せる。

クラスメートにも何度も同じようなことを聞かれたことがあった。最初の頃は口で題名を言っていたのだが読んでいるのはラノベなので「え？ 何それ？」みたいな反応をされることが多かった。なので最近は一番最初のページを見せることにしている。すると「へえ～」と微妙な反応をされることも多いが、俺は気にせずに題名を見せたらすぐ読書に戻るようにしている。中には「宮野もこうこうの好きなのか！？」と食いついてくる奴もいたが俺は「まあ」とか「それなりに」などそつなく返して会話を終わらせてしまうので会話が続かずそのままクラスメートが席に戻っていく。

「へえ～君もライトノベルとか読むんだ。」

「も？」

「うん。前の学校の友達の影響で私もそれなりに読むんだ。意外だつた？」「うんまあ。」

正直驚いた女子でもオタクとかはいるけど長塚はそういうのまったく興味がないと思っていた。

「私がこういうの読んだら変かなあ？」

「別にいいんじゃないの。人の趣味とかは人それぞれだし。」

「そつか、そうだね。」

今度こそこれで会話は終わったな

つてここでラノベでも読みますか

「そういえば…」

まだ何があるのか…

しかも俺の前の席に俺の方を向いて座つてきやがつた  
「名前教えてほしいんだけど。」

そういえば、俺まだこいつに名前教えてなかつたな…

「富野和也。」

すると長塚は

「これからよろしくね！ 和也君ー！」

と笑顔で俺に言つてきた。

……てかいきなり名前かよ

そんこんなで三十分は長塚と話している。

「ねえ聞いてる？」

「ん？ああ聞いてる聞いてる。」

学校の生徒は八時三十分には学校に着いて席に座らなければならぬ  
い。

そして俺はいつも七時三十分には学校に来ている。

つまり俺は一時間ほど早く学校に来ているのだ。

部活の朝練がある奴らはこの時間帯に学校に来ているがそれ以外の  
連中は普通はいない。

朝練のある奴らは当たり前だが部活の練習に出ているため教室には  
いない。

つまり俺は三十分ほど前からじずっと長塚と一人つきりで話をしてい  
たわけだが、もうすぐその必要もなくなる。

八時になると何人かの生徒がちょくちょくとだが登校してくる。  
別に長塚を嫌つていいわけではないが、三十分も誰か、しかも女子  
と話すのはなんていうか色々と疲れる。

学校で俺は基本的に一人でいるのでもいつも長時間（と言つても三十分だが）話をするのに慣れていない。

中学校の時はそれなりに仲のいい奴が実はいたりはするがそいつは男で女子とこれだけ話をするのは初めてだつたりすると。とにかく今はこの二人っきりの状況をどうにかできればいい早く誰か来てくれ

といつ願いが叶つたのか

ガラツ

来たつ！！

「おはよー！」

「おはよー。長塚さん来るの早いんだね。」

俺を救つてくれたのは吉田だつたか吉野だつたか…たぶん吉田だつたと思つ。

控えめな性格だが人当たりが良く友達も多い子だ。

「吉田さんだつたよね？」

「うん。私の名前覚えてくれてたんだ？」

良かつた：名前あつてた。

「昨日は色々ありがとうございました。助かっちゃった。」

「ううん。私はそんなお礼を言われるようなことしないよ。」

ひづやらー人は昨日の何やらあつたようでそれなりに仲が良さやつだ。

「あ、そうだ。昨日のことなんだけど…」

とそのまま長塚は席を立ちあがり、吉田の方に行つてそのまま今度は吉田と話し始めた。

やつと解放された。

ありがと吉田！

声に出さず心の中で感謝の言葉を吉田に送つた。

もう今日は疲れた

まだ授業すら受けてないのに俺はとてつもない疲労感を感じた。  
もう今日みたいなことはこりごりだ。

## 第一話 「…………ああああああと病院行つてへる。」

昨日の朝教室で長塚と遭遇した俺はH-Yを〇寸前まで追いつめられたところ、吉田のおかげでその危機的状況を抜けることができた。その日は頭の中で吉田のことを神と崇めたりもした。

朝のことがあつてその日の授業はとても体力を消費した。

この時点で俺は色々と限界に達している気がしないでもないが、この日は朝のこと以外は何事もなく無事に過ごすことができたのでまあ良しとしよう。

問題は今だ。

「おはよー！」

何故また長塚がこの時間帯に教室にいるんだ？

昨日は確か長塚が時間を見間違えたからこの時間に来ていたのだとだ

「おはよ。」

じゃあ何で今日もこの時間に長塚がいるんだ？

あれ？

これはつまりまた吉田様……じゃない吉田が来るまで話さなきゃいけないのか？

おかしいなわけがわからぬ

あれ？あれ？

やばいこのままだと自分を見失う気がする  
そうなると精神科に行くことになるな

できたらそれは避けたい

よし一旦落ち着こう一度深呼吸でもして

「ヒツヒツフー、ヒツヒツフー。」

「どうしたの和也君？ いきなりリマーズ法なんかしだして？」

「…………ごめんちよつと病院行つてくる。」

精神科に行こう

今ならまだ間に合つはず

「えつ？ 病院つてまさか…産婦人科？」

「ちげえよ！」

「違うの？」

「だから違うつて！ つてか何故に産婦人科！？」

「だつていきなりラマーズ法なんかするし。」「

「あ、ああ…」

そりやそうか、いきなりラマーズ法なんかして病院に行くなんて言つたら…

「おかしいだろ！？ 僕男だから！ 子供なんて産めないから…」

「とか言いつつも実は和也君女の子だつたり…」

「しないから！ 僕は正真正銘男だから！」

何で俺朝っぱらからこんなこと叫んでるんだろう…

「ふふ、あははははは！」

「ど、どつした？」

いきなり笑い出すもんだから驚いた

いや長塚といると終始驚いてる気がする

「いやだつて、ふふ、あはははは！」

長塚は机を叩きながら大笑いしている。

やばい長塚が壊れた

さすがに壊れた奴を見捨てる気にはならないので

「大丈夫か長塚？ 一緒に精神科行くか？」

「い、一緒にって和也君も？」

笑うのを我慢しているのか肩をぴくぴくさせながら「ふ、ふふ。」

と笑いを漏らしている

はつきり言つてものすごく不気味だ

「最初に俺病院行くつて言つただる。」

「あれつて冗談じゃないの？」

「いや冗談抜きでだけど。」

最初はおかくなりつつあった俺が手遅れになる前にどうにかして

もうおうと思つていたのだが、今はこの壊れてしまつた長塚を治してもらひうのが先だう。

「も、もう無理。あははははは！」

長塚はもう修復不可能な気がする  
手遅れか…

それからじばらく経つてみやげなく長塚の笑いが収まつた。  
てかあんなに笑い続けるような奴初めて見たな

「はあはあ、ふ～」

「えつと大丈夫か？」

これがきつかけで長塚がおかしくなつていたりしないといいのだが

「うん。もう大丈夫。」

良かつた特に異常は見当たらない

ただでさえ長塚と関わるととてもなく体力を消費するのに壊れた  
長塚と関わつたら自分が自分でいられるかわかつたもんじやない。

「和也君つて面白いね。」

「は？」

何で俺が面白いとか言われなきやいけないんだ？

「俺なんかした？」

「だつていきなりラマーズ法なんかしたり、俺は正真正銘男だなん  
て言い出したり。」

「それは長塚が俺のこと実は女とか言つからだ。」

ラマーズ法については…まあ置いておこう

「普段からそういう風にしてればいいのに。」

「普段からつて長塚はまだ転校してきて三田田だろ。」

「そうだけど和也君つていつもあんな感じなんでしょう？」

あんな感じつてどんな感じと言おうとも思つたが長塚の言いたいこ  
とは何となく分かるので

「休み時間に一人でラノベ読んで何が悪い、話しかけられたらちや  
んと話すよつにしてるだろ。」

「そつなんだけど。うへんとね。」

長塚は何か言いたいようだがもつタイムアップだ  
もつすぐ奴が来る

「えへと、だから和也君は……」

ガラッ

「おはよー

やつてきたのは吉田だ

ナイスだ吉田ー！とすがは我らが神吉田様だ

「あ、おはよう真理ちゃん。」

真理って誰だ？

吉田の名前か？

まあ別になんだっていいや

もう疲れた今日はもう時間が来るまで寝ることじよ。

気が付けば昼休みだがはつきり言ひて今までの記憶がわっぽりない。  
だが寝ていたところわけでもないからして。  
何故なら授業を受けた記憶はないのにノートはじつかりと取つてあるのだ。しかもこれは俺の字だ。  
まあ特に気にすることではない  
どうせ授業中に語ることなど何もないし  
とにかくさつさと毎飯を買いに行くかな  
なんてことを考えていると。

「富野、ちよつとこの資料運ぶの手伝つてほしいんだが。  
俺を呼んだのは国語教師の田中先生。」

確か三十代の独身男

俺が知つてゐる情報はこれくらいだ  
ほかの教師のことよくは知らない

さうにこなだけの話俺は担任の名前を知らない  
いつも担任のことを頭の中では担任と呼んでいるし、声に出して呼ぶときは先生と呼んでいるから名前を知る必要もない。

「富野？ お～い富野？」

うちの学校には教師の情報なんでも知つてゐる生徒がいるといふ噂がある。

その噂には情報を使って教師を脅しているとか、教師だけでなく全校生徒の情報も持つてゐるなど色々ある。

さらにはその情報を売つてゐるなんて噂もあり一部では情報屋と呼ばれている。

この噂のどこまでが本当なのか知りたいところではあるがその情報屋を見つけることは無理だわ～と俺は諦めている。

「富野～？ み～や～の～」

なんかうるさい奴がいるな  
なんなんだまつたく

「おい富野、田中先生が呼んでるぞ。」

「え？ ああはい。なんですか？」

俺はクラスメイトに言われてようやく気が付いた。  
少しボーッとしてたようだ。

「この資料を運ぶの手伝つてほしいんだが。」

「はい。わかりました。」

できることなら「やなこつた。この独身男！」とか言つてみたいが  
そんなことをしたところで怒られるのが落ちなので心の中で叫びながらも田中先生の手伝いをする。

それ以前に俺は国語係なのでこの教師の手伝いを断るわけにはいかない。

本当なら何の係りにもなりたくなかったが、何かしらの係りもしくは委員会はやらなくてはならないのでしょうかがない。

「助かった。ありがと、田野。」

資料を職員室に運び終えた俺はさつと購買に行こうとしたのだが

「あ、宮野君ちゅうじよかった。」

俺の前に担任が現れた。

「このプリントを長塚さんに渡してほしいの。私ちょっと手が離せなくて。」

何でこう次から次へと

これじゃあ昼飯食う時間が無くなるんだが

「お願い渡しこしてくれる?」

「はい。わかりました。」

何故か断れない俺

「じゃあお願いね。」

そう言って担任は去つて行つた。

あれ? あの人どこに行つたんだ?

今うちの担任が職員室の窓から出て行つた気がするんだが気のせいだろうか?

でもまあ今はそんなことよりもさつさとのこのプリントを長塚に渡しにいかないと本気で昼飯を食つ時間が無くなる。

俺は教室に戻るや否やすぐに長塚を探したのだが

「いない。」

どうやら教室にはいないようだ

しうがないから学食の方にでも行くか

俺はそう思つて学食にも行つたのだが

「いない。」

ほかにも購買や中庭などにも行つたのだが

「いない。」

ここは一旦教室に戻つた方がいいかもしない

俺は教室に向かつたのだがその途中

「あ、長塚。」

長塚発見

「ん? 和也君どうかしたの?」

「このプリント渡すよう言われて。」

俺は担任に渡されたプリントを長塚に手渡す

「ありがとう。わざわざ私のこと探してくれたの?」

「そりだけど。」

「教室で私の机の上にでも置こうとしてくれればよかったですのに。」

「……」

「? 和也君?」

「……」

「おーい。」

その手があつた!?

うわ最悪俺つてバカだ

何で気が付かなかつた俺!

「和也君?」

「ああ、なんでもない。」

すつごいテンション下がつてきた  
元からテンション低い方だけど  
めっちゃテンション下がつてきた

「もしかして…気が付かないでずっと私のこと探してたの?」

「!?

「ふうん、そつか。」

「な、なんだよ。」

「べつにー、ふふふ。」

「言いたいことがあるならはつせつと…」

ぐう~

「……」

「和也君お昼食べてないの？」

すっかり忘れてた

途中から「意地でも見つけてやる！」とか思つて昼飯のこと忘れてた  
「いいんだよ。昼飯食う前のちょっとした運動つてやつだから。」  
なんか色々と無理矢理な言い訳な気がする

「でも…」

「だからいいんだって。今から食うから。」

「そうじゃなくて時間…」

## キーンゴーンカーンゴーン

「…もうないよ。」

「今すぐ食えばまだ間に合ひ。」

「でも和也君お昼ご飯は？」

よく考えてみたらまだ昼飯買つてもない

「…………」

「「」、「」めんね私のせいで。」

「別に長塚のせいではないだろ。」

もとはと言えば担任：いや田中が悪いんだ！

そうだあの独身男が俺に資料なんか運ぶのを手伝わせたのが悪いんだ！

あいつに食べ物の恨みは恐ろしいんだつてことを教えてやる。

「ふ、ふふ、ふふふふふふ。」

「か、和也君？ どうしたのなんか怖いよ？」

「大丈夫だ。悪いのは全て田中なんだから。」

「田中？」

「そう田中だ。あの独身国語教師だ。」

「田中先生がどうかしたの？」

「いやなに、ちょっとあいつに仕返しをするだけさ。」

「何する気？」

「まずはあいつの靴に画鋲を入れてやる。その後はせりがなく水  
や、山をあいつこ…ふふふふ。」

「和也君！ 落ち着いてそんな地味な嫌がらせはやめよう。」

「地味？ ならもつと派手にするか。」

「もつとだめだよ！？ ほらこいつもの和也君に戻つて。」

「安心しろ。俺は普段通りだ。ちょっとテンションが高いだけで至  
つて普通だ。」

「ほら元に戻つて。アンパンあげるから。」

「アンパンだと…」

「…何で長塚アンパン持つてんの？」

「お昼に食べようと思つてたんだけど食べきれなくて。」

「貰つていいの？」

「いいよ。はい。」

助かつたな田中今回は長塚のアンパンに免じて許してやる。

「ありがと。いくら？」

さすがにただで貰つう気にはならない。

「お金はいいよ。」

「でも…」

「いいくてば。私は先に教室に戻るから和也君も早くアンパン食べ  
て教室に戻つて来なよ。」

長塚は走つて行つてしまつた。

長塚よ…廊下は走るな

しかし長塚には借りができてしまつた

長塚はそんなこと気にしてはないだろうがそのつむらかの形で借  
り返さないとなあ

アンパンを食べながら長塚こどりを借りを返すか齒んでみると  
「ん？」

画鋲が一つ転がつていた。

「……」

… 中田の靴に入れといてやるか



## 第三話 「お前バカか？」

長塚が転校して来てから一週間ほどが経つた。  
長塚もクラスに馴染んで特にこれといって問題はない。

クラスの奴らも長塚を受け入れている様子だ。

そういう俺も長塚の存在に慣れつつある。

「おはよう！」

「おはよ。」

今では朝での挨拶も普通にできる。

まあ挨拶なんてできない方がおかしいんだけど……

「今日も早いね。」

「お前に言われたくねえよ。」

こんな軽口も言えるぜ！

「ほらほら和也君、今日は私はとお話ししよう。」

「は？ 話しなら毎朝してる気がするんだけど。」

長塚の奴この歳でぼけたか

「和也君いつもああとか、うんとか、そุดねとか相槌ばっかりじゃない。」

「そんなこと……」

ないとも言い切れない自分がいる

「だからたまには和也君から何か話題だしてよ。」

「そんなこと言われてもな……」

俺は基本聞き手だし、何かを話すにしても何かしら話題がないと何を話せばいいかよくわからない。

だから自分から話題をだせと言われてもどうすればいいかわからな  
い。

ホントに俺って……

「ほれほれ私に聞きたいこととかでもいいからさ。」

「ん……」

「聞きたいことが… うだな

「そういやずつと前から気になつてたことがあるんだ。」

「何々？ 何でも聞いて。」

「すっかり聞くの忘れてたんだけど、何で長塚くんに早く学校に来てるんだ？」

「え？ 聞きたいことってそれ？」

「そうだよ。確か最初は時間見間違えたんだよな？」

「そうだけど。」

「それはいいんだよ。誰だつてミスすることはある。でもそれから毎日この時間に来るのがわからん。ありえないとは思うが毎日時間を見間違えたりしてるので？」

だとしたら長塚は悪い意味ですごいと思つ。

「いくらなんでもそれはないよ。」

「なら何でこんな時間に来るんだよ？」

「そんなの決まってるよー！」

「？」

「和也君とお話ししたいから決まってるでしょー！」

「…………」

「何言つてんだこいつ

「その何言つてんだ！」つづいて吉田やめてくれない？

「お前バカか？」

「む。失礼な」と言わないでよ。私それなりに成績いいんだよ。」

「いやそういう意味じゃなくて。」

「大体そんなにおかしなことかな？」

「おかしいにもほどがある。何で俺？ 吉田とかならまだわかるが。

「…………」

「真理ちゃんとお話しするのも好きだけど、和也君とお話しするのも楽しいよ。」

「本当によくわかんない奴だな。俺なんかと話して何が楽しいんだか。」

「そりがな？ 和也君つて面白いじゃん。」「

「俺からしたら長塚の方が断然面白いわ。」「

「そ、そりがな。なんか照れるな。えへへ。」「

「何で照れるんだよ！ 面白いって言われて照れる奴初めて見たわ

！ 大体褒めてすらないからな。」「

長塚と話すとホント疲れる。

「ほらほら他にも何か質問ないの？」「

「ない。」

俺が聞きたかったのはこれだけだからな

「ええーもつと私になんか聞いてよ。なんでも答えるよ。」「

「ないもんはない。」

「ちえー、いいもんなら私が和也君に質問するもん。」「

「俺に？」「

また面倒なことになってきたな

「そつちだけ質問しといて私の聞きたい」とは無視なんてする「ことはしないよね。」「

こいつ最初からこれが目的か

しようがない

「何が聞きたい？ 俺の答えられる範囲でなら答えてやるから。」「

「え？ ホントにいいの？」「

なんなんだこいつ自分から聞いておいて

「聞きたいことがないなら無理に聞くことはないだろ。」「

「待つて待つて少しだけ考え方せて。」「

「言つておくけど質問は一回だけな。」「

「何で？」

「俺はお前に一回しか質問してないんだから長塚も俺に聞ける」と

は一回だ。」「

「和也君すごい！」

「お前にだけは言われたくないわ！」「

はあ早く吉田来てくれないかな

「ならどうあんでもいいや。」

「は？」

何を言つてゐんだ長塚は

「だから今は質問しない。そのうち質問するからその時に和也君、ちやんと答えてね。」

「やっぱりお前の方がずるいわーー！」

今現在授業中

科目は国語、教師は田中先生。

今思えば俺も地味に嫌なことをやつてしまつたと反省せよとしている。ついカツとなつてやつてしまつた。

だが後悔はしていない。

あの時俺がやつたことは正しかつたと少しばかり思つていたりする。田中先生の靴に入れた画鋲がどうなつたかは知らない。てかもう興味ない。

今俺は反省の意味を込めて今回は少し真面目に授業を受けていく。「つまりこの作者の伝えたいことは」

今回は真面目にしているが次回からはいつも通りにしようとつぱり言つて疲れるからな  
「次にこの…」

キーン／ーンカーン／ーン

「うと今日はいいまで。」

さまあチャイムに授業邪魔されてやんの

「富野あとでノートを集めて俺のところに持つてきてくれ。罰が当たった

といふか何であとでなんだよ

今でいいじゃん

今ノート集めた方が絶対にいいじゃん！

「はい命令。」

「起立、礼！」

嫌がらせか！嫌がらせなのか！？

やはり田中を許すわけにはいけないようだ

「はあめんどくさ…」

「ていうか重い！

「このノートたち重い！

正直一人でこれを職員室まで持つていいくのはきついかもしれん  
田中めこれをわかつていてわざと俺に  
俺の中でどんどん田中への恨みが膨れ上がりしていく気がする。

「富野君大丈夫？」

「え？ ああまあ。」

俺に声をかけてきたのは吉田だった

一時期俺の中で神として崇められていたことのある吉田様が一体俺  
に何の用だ？

てか用があるなら早くしてほしい腕がきつい

「ノート運ぶの手伝いましょうか？」

「は？」

いきなり手伝うとか言つもんだから驚いた。

でもよくよく考えてみると吉田は人が困つてしたりするとよく声を  
かけたりすることが多いので今回もそんな感じだろう。

「いやいいよ。大丈夫問題ない。」

「いいからノート半分貸してください。」

吉田は俺からほどんど無理矢理な形でノートの半分を持ってくれた。

「せり職員室に行きませじょ。」

「あ、ああ。」

吉田の言つとおつわひをと行く」といふ

気まずい

せつさからずつと無言だ

こんなのとならやつぱり一人で運んだ方が気が楽だったと思つ。

「あの…」

「何?」

吉田の方から俺に話しかけてきた。

「えつと、その…」

「?」

何か言おうとしたが何を話せばいいかわからない様子。

どうやら吉田もこの気まずい空気が嫌らしい。

「あ、そうだ。富野君ってさ有希ちゃんと仲いいですよね。」

「えつとせ、有希って誰?」

おそらくはクラスの誰かだろうが、残念ながら俺はクラスメートの

苗字ならともかく名前はわからない。

「長塚有希ちゃんのこと。こつも朝一人で喋つてるじゃないですか。

」

どうやら有希とは長塚のことらしい

「朝は一人しかいないから喋つてるだけで別に仲がいいわけじゃないと思つよ。」

「嘘。富野君つてあんまりクラスの子と話したりしないじゃないですか。普段なら一人きりでも気にせず一人で本読んでるのに有希ちゃんとはよく話してるでしょ。」

それは長塚が俺にかまつてくるだけです

そんなことを言つたところで吉田が信じるとも思えない

「それに有希ちゃんと話してるとよく富野君の名前が有希ちゃんの

「から出でますよ。」

待て待てあいっは一体何を話してるんだ?

変なことを吹き込んだりしてなきやいいが

「和也君って本当は面白いんだよ。とかよく聞きます。」

あいっはホントに何を…

「それに有希ちゃん転校してきたばかりなのに畠野君のこと名前で呼んでるじゃないですか。」

「それなら吉田だつて名前で呼ばれてるだろ。」

「そりや私は女の子ですから、男子で名前呼ばれてるの畠野君だけだと思います。」

「どうだかな。」

長塚つて何考えてるかよくわからないんだよな

「あ、着きましたよ。」

## ガラツ

「失礼します。」

「田中はどこだ?」

「田中先生ノート持つきました。」

「どうやら吉田が田中を見つけてくれたらしい。」

「おう、畠野お疲れ。吉田は畠野の手伝いか? 偉いな。」

「いえ、私が勝手に手伝つただけですし。」

「じゃあ先生失礼します。」

れいわと教室に戻るかな

「吉田手伝つてくれてありがとう。」

教室に着いたので吉田にお礼を言つておく

「どういたしまし。」

「む。和也君真理ちゃんにデレデレしてない?」

「デレデレつて表現この場では使わんだね!お礼言つただけだし。」

てかいきなり現れるな。心臓に悪い。」

ここで長塚の登場

気配もなく表れたので少しばかり驚いた

「そんな照れなくてもいいのに。」

「ちょっと待つた。なんか会話になつてないぞ。」

「ごまかさないで！」

「何をだよ！　ていうか会話になつてないって言つてるだろ。」

「……」

なんか吉田がポカんとしてる気がする

「ね！　だから言つたでしょ。和也君は面白いつて。」

「ふふ。そうね。」

はあホント疲れた

席に戻る

「あれ？　和也君どこ行くの？」

「どこつて自分の席に戻るんだよ。」

「もつと喋ろうよ。」

「無理、疲れた。」

「ちえーケチ。」

「ケチで結構。」

長塚と話すと体力が「じつそりと持つていかれるわ…

## 第四話 「見たらわかるだろ？ 先制攻撃だよ」

今日は日曜日、つまり休日だ

今現在俺は一人で街をぶらぶらしている。

俺の休日を過ごし方は日によって違う。

昼過ぎまで寝ていることもあれば早起きすることもある。

ひどい日には夕方まで寝てることもある。

早起きをしたときは今みたいに一人で出かけたりすることが多い。はつきり言つてしまえば俺はいつも休日に暇を持て余している。だから何か面白いことがないかと一人で街に来ているわけだ。

「なんかのどが渇いたな」

近くに自動販売機を見つけたので俺は財布をポケットから

「あり？」

財布がない。

掏られたとは思えない

そうなると…

「家か…」

俺は財布を家に忘れたらしい

最悪だな

こんな日はよくないことが起こる気がする

今日はもう帰った方がいいかもな

俺は帰ろうと来た道を戻ろうとしたとき

「いいじゃん俺らと遊ぼうぜ」

「なんか奢るからさ」

「ほり一緒に行こう」

ナンパをしている連中が田んことまつた。

「迷惑なんで」

ナンパされてるのはどうやら長塚のようだ。

何で休みの日まで長塚の顔を見なきゃならんのだろう？

ちなみにナンパされているのが長塚だから気になつたわけではない俺が気になつたのは

「そう言わずに」と

「俺らと一緒に遊ぼうよ」

「ほら一緒に行こう」

ナンパをしている三人組だ

正確には三人組の髪型だが  
「ねえ無視しないでさあ」

「ちょっとだけでいいから」

「ほら一緒に行こう」

上からアフロ、モヒカン、リーゼントとこうものかいに組み合せなのだ

ところであつときから気になつていたのだが  
リーゼントの奴さつきから「ほら一緒に行こう」としか言ってない  
のだがほかに言えることがないのだろうか?

「もうやめてください。しつこいですみ」

長塚もからまれて迷惑してるようだ

別に見なかつたことにしてもいいんだけど

長塚には前に貰つたアンパンの借りがあるんだよな…  
助けるべきだよな

となると問題はどうやって長塚を助けよう?

彼氏の振りでもするか?

でもなあそんなどしたら……

「おい長塚」

「え? 和也君」

「すいませんこいつ俺の彼女なんで」

「はあ冴えない顔いやがつて失せる」

「何?」

「てめえなんかお呼びじゃねえんだよ

「言つてくれんじやん、いかれた髪型しやがつてそつちが失せろ」

「あん言つてくれんじやねえか」

「わよつくら痛い田みわせてやんよ」

……とかなつて思いつきサンダバックにされるよな

一対一ならそれなりに自信はあるが二、三人を相手にしたら確実に負ける

とすると俺がすべきことは…

「ねえねえ、いいでしょ少しふうりー」

「だからしつこいつて……へ？」

「んん？ どうしたの？ 一緒にお茶してくれる気」 ぐべりつ

！」

俺がすべきことそれは

「な！？ てめえいきなり何しやが へぶちつ…」

不意打ち

正々堂々と喧嘩して勝てないなら不意打ちで相手の数を減らす  
モヒカンとリーゼントは倒した  
残るはアフロ！

「か、和也君！？」

「よう長塚、こんなところで奇遇だな」

「奇遇だなじやないよ… 何してるの…？」

「見たらわかるだろ？ 先制攻撃だよ

「いきなり攻撃しちゃだめだよ…」

「よく聞けよ長塚。富野家の家訓その一、やうれる前に殺れ…」

「ホントにそんな家訓あるの…？」

「たつた今俺が作つた家訓です

「いい度胸してんじやねえか

俺の目の前にはアフロ

他の一人が目を覚ます前にかたずけるか

「一つ聞きたいことがあるんだけど」

「ああん？」

「なんで三人そろってそんな愉快な髪型してんの？」

「バカにしてんのかてめえ、超かつこいいだろが」

どうやらこいつらは髪型どころか頭も愉快な方たちのようだ

「ところでアフロ、後ろを見てみな

「ん？」

「隙あり！」

俺は全力で蹴りをアフロの股間に放った

「おふう○？ %！」

我ながら恐ろしいことをやってしまった

「ほり行くぞ」

この隙に長塚の手を取つてこの場から離れよう

「はあ疲れた

「ありがとね和也君。助かっちゃった」

「これで貸し借りはなし」

「え？ 何のこと？」

「前にアンパンくれただろ。これで借りは返したから

「別にアンパンくらい」

「いいんだよ。これだ貸し借りはなしいな？」

「うん。わかった」

疲れけど借りは返せたし一件落着かな？

「でもやり過ぎじゃなかつた？」

「何が？」

「あの人たちいきなり殴つちゃたりして」

アフロたちのことか

「別にいいんだよ。ああいう連中にはある方法が一番だ」

「でもどうせ助けてくれるんだつたら彼氏の振りでもしてくれればよかつたのに」

何故か少し残念そうに言つ長塚

それも考えたんだけどな

「その場合俺はボコボコにされてたよ」

ああやだやだ

「んじや俺帰るわ

「帰っちゃうの？」

「特に目的があつてここに来てるわけでもないしな

「なら私の買い物に付き合つてよ」

「は？」

「特にやることもないんでしょ？ ならいいじゃない

「そんなことは誰か友達にでも頼めよ

「だから友達の和也君に頼んでるんじやない

「俺以外の奴に頼め」

「真理ちゃんやほかの子も今日はようがあるんだって

「そりゃ残念だつたな」

「ねえだめ？」

なんか長塚が上目使いで言つてきた。

これはあれか？

狙つてやつてるのか？

不覚にも一瞬可愛いと思つてしまつた。

「それに一人でいたらまたナンパされるかもだし」

長塚ははつきり言つて可愛い方だからありえなくはない。

「和也君がいてくれたら心強いなあ」

だんだんと追い詰められている気がするな

「それとも私と一緒にいるの嫌？」

今にも泣きだしそうな顔をしてそんなことを言わると正直断れないと。

「これはもう俺の負けだな

「わかったよ。少しだけお前の買い物に付き合えばいいんだが」「いいの?」

「いいよもう俺の負けだ」

「やった! ならさつそく行こう!」

そうして俺は長塚の買い物に付き合つことになった。

「んで、どこ行くんだ?」

「ん~とね、まずは服を見ようかなって思つて  
これはもしや荷物持ちとかさせられるのか?」

いやまあ別にいいんだけどな

そんなこんなで俺は今長塚と一緒に服を見て回つているわけだが

「あ、この服可愛いかも」

長い!

よく女の子の買い物には時間がかかるなんていうが  
ホントに長い  
もう結構な時間服を見ている

「和也君この服私に似合うと思う?」

そういうて長塚は薄ピンクのカーディガンを俺に見せてきた。

「ん、まあ似合うと思う」

ていうか長塚なら何でも着こなす気がする。

そういえば

「今更だけど長塚の私服初めて見たな」

長塚はチェック柄のマキシ丈のワンピースに白のカーディガンを着て、涼しさが感じられる格好だ。

「ホントに今更だね。それに私だって和也君の私服姿見るの初めてだよ」

俺はジーンズで黒のインナーにTシャツを着ている。  
ちなみにTシャツは家にあつたものを適当に選んで着た。  
俺はあまり服装を気にしない。

変に目立つよくな服裝だつたり、あまりにもダサい服裝でなければ

地味でも何でもいいと俺は思つてゐる。

「もつこんな時間だね。そりそろお昼にしようか」

気が付けばもう昼だつた。

相当な時間服を見ていたことになる。

「お昼どつする? ファミレスにでも行く?」

長塚が昼はどうするか聞いてきたが

「悪いが俺は昼飯はバスだ。どうしても食べたきゃ一人で行ってくれ」

「え? どうして?」

そんなこと決まつてゐる

「財布を家に忘れたからだ」

「じゃあ今お金持つてないの?」

「ああ。財布を忘れたことに気が付いて家に帰つたらナンパされてる長塚を見つけてな」

「そして今に至ると」

「そういうことだから俺は昼飯が食えないわけだ」

「そつか。ならそつだな…」

「どうかしたか?」

「なら私がお昼奢つてあげるよ」

それは魅力的な提案だが

「そうするとまた借りができるから遠慮する」

「私は借りとか気にしないからさ」

「俺が気にするんだよ」

「だったらお昼奢る代わりに午後も私の買い物に付き合つて。それでいいでしょ」

つまり今日一日長塚の買い物に付き合つてとなるわけか…正直なところ腹減つてゐんだよな

「うへん」

「ねえいいでしょ。好きなだけ奢つてあげるから

「…わかつた。それでいい」

空腹には勝てなかつた

「ん、なら行こつー」

俺は妙に機嫌な長塚と毎飯を食つことにした。

その日は結局ホントに一日買ひ物に付き合はされた。

「今日はありがとね」

「俺も毎飯奢つてもらつたからなお互い様だ」

今俺たちは家に帰つてゐる途中なのだが

「ところで長塚の家つてこの辺なのか?」

「そうだよ」

俺の家もこの辺りなのだが意外と家が近くなのかもしけない。

「あ、私こっちだから」

「家まで送つてくか?」

「ううん大丈夫。私のうちもつ近くだから」

「そつかじやあまたな」

「うんまた明日」

俺は長塚と別れて家に向かう。

休日なのに休めた気がしない一日だつたな。

でもなんだか少し楽しかったような気がしないでもない一日だつた。

## 第五話「はあ、空が青いや」

休めた気がしない休日が終わり

週明けの月曜日

俺は今通学路を歩いている。

俺の周りに同じ学校の生徒はない。

何故なら俺はいつも家を出る時間が早いから…

だったら良かったのだが、そりではなく今俺は絶賛遅刻中なのである。

起きて時間を見た時にはもう間に合わないと確信した。

なので俺は諦めていつもよりゆっくりと学校へ向かっている。

今学校は一時間目の途中だらう。

もう学校には着くので一時間目が終わる前までには間に合つと思つ。

授業なんてどうでもいいのだがノートを写さないといけない。

先生の話はまともに聞かないせにひつたことは眞面目にやつてゐる。

ノートなんて友達に見せてもらえばいいとか思うだらうが

残念なことに俺にはノートを見せてくれるような友達などいない。

別に頼んだのにノートを見せてくれないとかそういう意味ではなく、気軽にノートなどの貸し借りのできるほど仲のいい友達がないといふ意味である。

まあそれはそれで残念な奴だとは思う。

だが俺が仲のいい奴を作らなかつた結果なので文句は言わない。

他の奴に悲しい奴とか言われても俺は悲しいなんて思わない。

俺は自分で決めてこういう生き方をしてるのだから。

不便だなとは思つたりはするが…

実際にクラスの誰かに頼めばノートぐらい貸してはくれるだらうが

俺はそうしない。

何故かわからないがそうしたくないのだ。

そんな理由で俺は今まですべての授業のノートを自分の力だけで写している。

ラッキーなことに高校生になつてからは熱が出るときはいつも休日だつたので特に問題はなかつた。

前に一度だけ金曜日の朝に微熱が出たことがあつたのだが、次の日は休みなので無理をして学校に行つたことがある。こんなことをしていたため、俺は去年一度も学校を休むことはなかつた。

我ながらバカなことしてんなあ。

何度そう思ったことか。

気が付けばもう学校だつた。

俺は靴を履き替え教室へ

ガラツ

「遅刻だぞ富野」

言われなくてもわかつてゐる。

教室に入つてきた俺に言つてきたのは地理の教師の原田先生だ。

男なのだが噂では女装が趣味らしい。

ホントかどうかは知らないが。

「すみません。寝坊しました」

俺は自分の席に着いて授業の準備をする。

急いでノートを写さないと。

俺はノートを開いて黒板を…

「は？」

思わず声を上げてしまつた。

「どうかしたか？ 富野？」

「なんでもないです」

黒板にはぎつしりと字が書かれている。  
そりやもうぎつしりと。

黒板の隅から隅へと。

何で遅刻した今日に限つてこんなに書かれてるんだよ…

いつもはこんなに書かないくせに、

少ない日なんか黒板に三、四行ぐらしが書かないくせに。

とにかく「写さないと。

授業が終わるまで後十分。

原田先生はさうこ文字を増やしていく。

「ここ消すぞー」

「あ、少し待ってください」

やばい急がなこと字が消されてしまつ。

「いいか?」

「あ、はい。そこはもういいです。」

正直間に合つた気がしないが諦めるわけにはいか。

## キーンローンカーンローン

アウト!

間に合わなかつた。

「今日はここまでだな

「起立、礼!」

嫌まだだ。

まだ黒板の字は残つてる。

俺は諦めずに黒板の字を…

「日直めんどくさい~」

日直に字を消された。

めんどくさにならやうなきやいいじやん!

結局黒板の字は消され、俺はノートを「写す」とはできなかつた。

昼休み俺はいつも通り屋上で昼飯を

「はあ～」

食べていなかつた。

別にこんなことぐらいたい氣にしなくてもいいことは思つが、  
ここまで頑張つてきたのでなんか悔しい。

「はあ、空が青いや」

空を見て現実逃避する俺。

屋上にいるので上を見れば空が広がつてゐる。  
広大な空に比べればこんなことはないわけなこと。  
なんて割り切れるはずもなく。

「あーくわつ」

いつそのことこのままぐれてしまおうか。  
そんなことを考えていると

ガチャツ

「は？」

誰かが屋上に来たようだ。

つてやばい！

もし教師だつたらなんて言い訳すりやいいんだ！？

ホント今日は厄日だな。

もう一つそこから飛び降りてしまおうか…

「あ、和也君いた。」

「……」

長塚がやってきた。

「やつやつ今来たのは長塚だつたらし。」

「…………」

「和也君どうかしたの？」

「いやもつわ……ここから飛び降りようかなつて」

「ええ！？ だ、だめだよ！ そんなことしちゃ」

「ふつ」

「なんで鼻で笑うの！？ 大体なんで飛び降りようなんて」

「そりや俺が寝坊したせい……」

「遅刻してノートが……ノートが……！」

「え、そんなこと？」

「そんなことだと！」

「何でそんなに怒るの！？ 一回遅刻した遅刻くらいで……」

「遅刻のことなんかどうでもいいわ！！」

「ええ！？ なら何で怒ってるのか余計わからないよ」

「くそつ何で俺が遅刻した日に限つてあんなに書いてる」とが多いんだよ……」

「ああ、今日の地理書くこと多かつたよね」

「油断した。ノートを『すだけと思つてゆつくり来たのが間違いだつた」

ダッシュで学校に来てればよかつた。

「和也君ノート『すの間に合わなかつたの？」

「ただけど……」

「ならノート貸さうか？」

「うん？」

「だからノート貸してあげるよ」

「…………」

「どうしよう……」

「やはりここは借りておぐべきか……」

「でもよくよく考えてみると俺つて長塚に助けてもらひと多によな。アンパン貰つたり、昼飯奢つて貰つたり。」

また借りを作ることになるんだよな。

「あ、もう誰かに借りてる?..」

「いや、そうじゃないけど」

ここまで教師の言つことば全て聞き流しノートを[写す]ことだけを頑

張ってきたんだし、

借りれるもんは借りよ。

「ノート貸してもらうわ」

「わかった。後で教室で渡すから」

「ああ」

そういうやなんか忘れてる気が…

「和也君って昼休みいつもここに来てるの?..」

「そうだけど……ってなんで長塚がここに来てんだよー?..」

聞くのすっかり忘れてた。

「朝に和也君とお話しできなかつたから昼休みにしようと思つてた  
んだけど、よく考えてみると和也君って昼休みいつも教室にいな  
からこいつそりと後をつけてきた

ホントに油断してた。

いつもはもつと周りを気にしてたんだけど今日はノートのことでさ  
つきまで地味にへこんでたからなあ。

「屋上つて鍵が掛かつて一般生徒は入れないはずだけど」

「俺は鍵を持つてるから問題なく来れる」

「何で和也君が屋上の鍵なんか持つてるの?..」

「秘密」

「……」

長塚が「ひちを睨みつけてくる。

「ジ———」

「……」

「ジ———」

「……」

「ジー——」

「ジ———って口に出しながら睨みつけるのやめてくれるか

「ジ———」

「だから……」

「ジ———」

「……わかった。教えてやるから」「ホント!?

何故だろ?う?

長塚には勝てない気がする。

「俺が屋上の鍵を持つてる理由だよな

「うんうん」

「それは去年に俺が拾つたからだ」

「拾つた?」

「そう拾つた。去年の今頃にな廊下に落ちてたんだよ

「それをそのまま自分の物にしちゃつたの?」

「最初は誰かの家の鍵かとも思つたんだけど、よく見たら学校のだ  
つたからな」

「だからって自分の物にするのはどうかと…」

「最初は大変だった。どこの部屋の鍵かわからなくて休み時間にな  
るたびに手当たり次第この鍵が合つとこをがして」

「そんなことずつとやつしたの?」

「結構苦労はしたけどな。それで屋上の鍵だとこいつことが判明して  
今に至る」

「先生にばれたりしなかったの?」

「ばれそうになつたことはあつたけど何とかやり過ごした。そんで  
昼休みに教師が来る」とはないとわかつてからは昼休みだけ来てる  
「だから和也君昼休みに教室にいないんだ」

「ここのこと知つてんの俺だけだからのんびりできんだよ  
「でも私も知っちゃたよ」

「そう問題はそれだ。

「「」のこと誰にも言わないでもいいと助かるんだが…」「それはいいんだけど…」

なんか嫌な予感がする。

「私も時々ここに来ていい?」「

そんなことだらうと思つたぞ。」「

「俺ここで一人で過ごす時間が好きだつたりするんだけど」

「たまに来るだけだから。お願ひ!」「

どうしたものか…

さつくり作った借りをこれで返したことにするればいいか。  
来るのはたまにって言つてるし

「いいぞ。たまになら」

「いいの?」

「いじつて言つただろ」

「やつた!」

「すいぶんと嬉しそうだな。」「

「あ、早く食べないと時間が無くなっちゃう」

「ん、そうだなさつやと食うつか

「うん!」

俺は袋からパンを取り出し、

長塚は弁当の蓋を開け

…ん?

「お前も一緒に食うのか?」「

「え? やつだけど」

長塚は「ほりつ」と俺に弁当を見せてきた。

長塚の弁当には卵焼きにウインナー、ほうれん草のおひたし、いんげんのベーコン巻き。

ご飯にはふりかけがかかっている。

「へ~美味しそうな弁当だな」

今更文句を言つたど「」で長塚は絶対に「」で昼飯を食べるだろうから、



11

「え、え？」

## 長塚が頬を赤く

勝った！

「御書院」

卷之二

「あつ」

「ぐちぐち」

「アーヴィングの本は、

「冗談抜きで美味かつた。」

「そ、そつかよがつた。もつと食べる？」

わすかはこれ以上食つたら長塚の分がなくなるだ

「樂部」の「樂」は、音楽の樂である。

食べたくなかつたと言えば嘘になるが。

——なに今度和也君の分のお弁当作ってきでありますか?」「

三〇一

うつむかへ顕て御用を以てまつた

今の俺がかつて一度負った二回戻りでしまってー。

機会があつたら頼む

卷之三

それほどまでに長塚の弁当は美味かつた。

なで金度一絃はお昼食へるとおは作つてくるれ！」

卷之二十一

俺だつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2726x/>

---

孤独な俺と無邪気な君と

2011年11月17日20時31分発行